ブヌン語（南部方言）における三種類の「前置詞」[1]

野島 本泰

nojima.motoyasu@gmail.com

キーワード：ブヌン語 南部方言 前置詞 空間的接頭辞

1 はじめに

ブヌン語[2]には、「場所」を表現する手段として、主に次の四つの異なる形式がある．まず例文(1)では、場所格標識 *sia* の後ろに場所を表す名詞 *tastas*「滝」が続いており（=*tia* については後述）、述語動詞 *tunghabin*「隠れた」の意味を補足的に説明している。この場所格標識 *sia* を本論文では前置詞 A と呼ぶことにする。

(1) 前置詞 A

tunghabin	*naia*	**sia**	**tastas=tia**.
AF.hide.oneself	NOM.3PL	LOC	waterfall=OBL1.DIST

「彼らは**その滝に**隠れた」

次に例文(2)では、前置詞 A（*sia*）に接頭辞 *'i-* がついた語 *'i-sia* の後ろに、場所を表す語 *dalah*「土」が続いており、それが後ろの動詞 *mal'anuhu*「座る」の意味を補足的に説明

---

[1] この論文をまとめるにあたっては、数多くの方にお世話になった。まず、高雄縣那瑪夏郷達卡努瓦村、南投縣信義郷明徳村、南投縣仁愛郷中正村過坑出身のブヌン語話者の皆さんには、わずらわしい質問に丁寧に答えていただき、多くのことを教えていただいた。また、以下の方には、内容について貴重なご意見をいただいた：遠藤光暁、大西正幸、田口善久、千田俊太郎、土田滋、および東ユーラシア言語研究会の皆さん（あいうえお順、敬称略）。ここに謝意を表する。なお本論文中の誤りはすべて筆者（野島）に責任がある。

[2] ブヌン語（Bunun）は、台湾の中南部（南投縣・花蓮縣・台東縣・高雄縣）で話されている言語で、オーストロネシア語族に属する。大きく三つの方言に分けられている(Li 1988)。本論文で考察の対象とするのは南部方言である。データはすべて発表者が 1994 年 8 月から 2008 年 8 月にかけて高雄縣那瑪夏郷達卡努瓦村（旧：三民郷民生村）でおこなった調査で得られたものである。例文は主に民話テキストからとった．本論文で用いる表記は次の通り：子音 p, b, v, m, t, z[ð], d, n, s, l[ɬʲ], k, ng[ŋ],h[χ], '[ʔ]. （s, t は i の前で口蓋化し、それぞれ[ɕi], [tɕi]と発音される。また、s は同じ音節の中で母音 i の後ろに来た時も口蓋化して[iɕ]と発音されることがある。）y, w は外来語を含む少数の語にのみ用いられる。母音 a, u, i. アクセントは非弁別的である。2 音節以上からなる語の場合、語の後ろから数えて二番目の母音を含む音節が高いピッチで発音される。

本稿では次の略号を用いた。ADJ: adjective, AF: agent focus, CAUS: causative prefix, COMP: complementizer, CONJ: conjunction, DIST: distal, HS: reportive "hearsay" marker, IMP: imperative suffix, INTR: intransitive prefix, IRR: irrealis marker, LK: linker, LF: location focus, LOC: locative, LP: lexical prefix, NEU: neutral case, NOM: nominative, OBL1: oblique 1, OBL2: oblique 2, PAST: past-tense infix, PF: patient focus, POSS: possessive, PROX1: proximal 1, PROX2: proximal 2, RDP: reduplication, RF: referential focus, SP: spational prefix, TM: topic marker, 1SG: 'I', 1PLINC: inclusive 'we', 1PLEXC: exclusive 'we', 2SG: 'you(singular)', 2PL: 'you(plural)', 3SG: 'he', 'she', 'it', 3PL: 'they'.

している。本論文では、この *'i-sia* のように、語基 *sia* に接頭辞がついた語を前置詞 B と呼ぶことにする。

(2) 前置詞 B

malimazav	**'i-sia**	**dalah**	*mal'anuhu*
directly	SP(at)-LOC	ground	AFsit.down

「直接（何も敷かないで）**地面に**座る」

次に例文(3)では、語基 *-sian* に接頭辞 *'i-* がついたものが、後ろに前置詞 A＋名詞（*sia* + 名詞 *luluman*）を伴い、後ろの動詞 *mutataki*「糞をしている」を補足的に説明している（語基 *-sian* は場所格標識 *sia* に語尾 *-n* がついたものとしておく）。本論文では、この *'i-sia-n* のように、語基 *-sian* に接頭辞のついた語を前置詞 C と呼ぶことにする。

(3) 前置詞 C

hudas	*hai,*	**'i-sia-n**	**sia**	**luluman**	*m-u-ta-taki.*
grandpa	TM	SP(at)-LOC-N	LOC	pigsty	AF-INTR-RDP-defecate

「おじいさんは**豚小屋で**糞をしている」

最後に例文(4)では、「家」を表す自由形態素 *lumah* に**じかに**接頭辞 *'i-* がついた語が、「家にいる」という意味の述語動詞として用いられている。本論文では、この *'i-lumah* のように空間を表す語基に接頭辞が直接ついてできた語を空間動詞と呼ぶことにする。

(4) 空間動詞

hanup	*a*	*mabananaz*	*at,*	**'i-lumah**	*maluspigaz.*
AF.go.hunt	NOM	man	and	SP(at)-house	woman

「夫は狩に行き、妻は**家にいた**」

本論文では、以上の四種類の場所表現のうち、最初の三つを比較しながら考察する。ここで「場所」ということばはひじょうに広い意味で使っている。「場所」には、「畑にいる」というときのような**居所**や、「畑へ行く」というときのような**方向**、それに「畑から帰ってくる」というときのような**起点**など、さまざまな空間的概念が含まれる。

2 文法概略

前置詞について詳しく見ていく前に、まずブヌン語の文法を概略することにする。

2.1 節の構造

ブヌン語では、述語（predicate）が節（clause）の先頭に置かれ、項（argument）や付加語（adjunct）がその後ろに続く。例文(5)から例文(7)からわかるように、「死ぬ」「見る」「回る」といった出来事を表す成分、つまり述語が節の先頭に来て、その述語の意味をさらに詳しく補う成分（すなわち項や付加語）がその後ろに続く。

(5) *m-ataz [a 'asu=a].*
AF-die NOM dog=NOM.DIST
「その犬は死んだ。」

(6) *ma-pataz [kaimin] [mas hanvang]*
AF-kill NOM.1PLEXC OBL deer
「私どもは鹿を殺した」

(7) *mauk-'ainunu-a [sia dalah=tan]*
AF.LP(go.round)-round-AF.IMP LOC ground=OBL.PROX2
「この地を一周してきなさい」

項や付加語は次の構造を持つ：

（格標識[3]＋）頭部(head)（＋後倚辞指示詞(enclitic demonstrative)）

述語の直後には、小詞 =*in*「もう、すでに」（新しい事態が生じたことを表す）や小詞 *dau*「…だそうだ」（表される事柄が「伝聞情報に基づく」ものであることを表す）などの語が現れることがある。

(8) *ma-daing***=in** *a* *'uvaaz=a.*
ADJ-big=already NOM child=NOM.DIST
「その子供は大きくなった」

(9) *'aupa* *m-u-'ampuk***=in** *a* *bunun* *hai,* *pahusil-un***=in**
because AF-INTR-gather= already NOM man CONJ hand.out-PF=already

a *titi*
NOM meat
「人々が集まったので、肉を分けた」

(10) *masa* *taus'uvaaz***=in** **dau** *maluspigaz=a* *hai,*
when AF.give.birth=already HS woman=NOM.DIST CONJ

m-ataz *a* *'asu=a.*
AF-die NOM dog=NOM.DIST
「その女が出産した時、その犬は死んだそうだ」

2.2 格標示

普通名詞では、格は次の二つの手段により標示される[4]：名詞句の前に置かれる小詞による標示と、名詞句の後ろに置かれる小詞による標示である。本論文では、前者を前置詞的格標識と呼び、後者を後倚辞指示詞と呼ぶことにする。

後倚辞指示詞は格標示と指示物の話者からの距離とを同時に示す小詞で、次のような体系をなす。

	主格(NOM)	斜格 1(OBL1)
近称 1(PROX1)	*(=in)*[5]	*=tin*
近称 2(PROX2)	*=an*	*=tan*
遠称(DIST)	*=a*	*=tia*

前置詞的格標識の体系は三項対立で、次のような体系をなす：

	主格（NOM)	斜格 2 (OBL2)	場所格（LOC)
前置詞的格標識	*a, maaz=a*	*mas / =s*	*sia*[6]

項のうち、主格で現れるものを、本論文では「主語項（subject argument)[7]」と呼ぶこと

---

[3] 格標識（case marker)は、冠詞(article)や構文標識(construction marker)と呼ばれることもある。

[4] それに対し、人称代名詞では格は屈折（語形変化）によって標示されるが、本論文ではこれについてはこれ以上述べない。

[5] 近称 1 の主格は、古くは存在したようだが、現在ではほとんど使用されない。

[6] 齊莉莎(2001:71)は主格と斜格を挙げているけれども、場所格は挙げていない。

[7] ここで主語項と呼ぶ名詞句は，先行研究では「焦点の置かれている名詞句（'focussed

にする。主語項は、述語の後ろに現れるほか、題目語(topic)として述語の前に立つこともある（例文(3)の *hudas*「おじいさん」が題目語である）。題目語は題目標識 *hai* とポーズにより、後続部分から切り離される。

2.3 動詞形態論

動詞の語形成においては、接辞の付加(affixation)や、重複(reduplication)がおこなわれる。接辞には、命令形を造る接尾辞や、過去形を造る接中辞の他に、ここで焦点接辞(focus affix)と呼ぶものや、語彙的接頭辞(lexical prefix)などの派生接辞がある。重複は、動詞が表す事象の反復相(repetitive)などを表すためにさかんにおこなわれる。

2.3.1 動詞の屈折

動詞の中心的メンバーは、時制、法、アスペクトによって活用する。

時制は二項体系で、無標と有標（過去時制）からなる。過去時制は、接中辞 *-in-* によって標示される。例は *maun*「食べる」に対し、*m<in>aun*「過去に食べたことがある」。

法は三項体系で、中立と命令と理由疑問からなる。命令は接尾辞 *-a* や *-av* によって標示される。例は *kaun-un*「食べる（中立）」に対し、*kaun-av*「なぜ食べたのか（理由疑問）」と *kaun-av*「食べなさい（命令）」。

アスペクトは二項体系で、無標と有標（反復相）からなる。反復相は、重複によって標示される。例は *maun*「食べる」に対し、*ma-maun*「何度も食べる」。

2.3.2 二種類の動詞語幹派生接辞

動詞語幹派生接辞のうち、本論文の議論に関係するものは次の 2 つである。

2.3.2.1 語彙的接頭辞

「たたく」「刺す」など具体的な動作などを表す接頭辞を語彙的接頭辞と呼ぶ。例は、*pataz-un*「殺す」に対して、*kali-pataz-un*「殴り殺す」、*kis-pataz-an*「刺し殺す」、*kit-pataz-un*「かみ殺す」、*kan-pataz-an*「足で（踏んだり、蹴ったりなどして）殺す」（下線をつけた部分が語彙的接頭辞である）。

2.3.2 空間的接頭辞

空間的接頭辞は、英語の前置詞が表すような《居所》、《方向》、《起点》などの空間的概念を表す。例は、*'i-*「…に（いる、ある）」、*kau-/ku-*「…に（行く、来る）」、*maisi-*「…から（来る）」などである。詳しくは第 3.1 節で見る。

2.4 いわゆる「焦点システム」

動詞は一般に焦点接辞を一つ（一つだけ）もつ（ゼロ接辞を含む）。ブヌン語の動詞は行為を表すだけでなく、そのままの形で（つまり「名詞化」と呼びうるような操作を特に受けずに）行為に関わる人や物を指示する表現としても用いられる。

指示表現(referential expression)として用いられた動詞が「動作主」を表すのか、「被動者」を表すのかは、その動詞がもつ焦点接辞の種類（焦点範疇）で決まる。たとえば、「殺す」を表す動詞の場合、動作主焦点形の *ma-pataz* は動作主つまり「殺す側('killer')」を表すのに対して、被動者焦点形の *pataz-un* は被動者つまり「殺される側('killee')」を表す。

動詞が述語として用いられた場合は、述語動詞の焦点接辞が主語項の「意味役割」を標示していると見ることができる。例文(11)では主語項（「私ども」）が「殺す」という行為の動作主であることが本動詞の焦点接辞(*ma-*)からわかる．それに対し例文(12)では、本動

NP')」あるいは「主語（subject)」と呼ばれている(Jeng 1977:117, Starosta 1988:547)。

詞の被動者焦点接辞(*-un*)から、主語項（「蛇」）が「殺す」という行為の被動者であることがわかる。

(11) *ma-pataz* *[kaimin]* *[mas* *hanvang]*
AF-kill NOM.1PLEXC OBL2 deer
「私どもは鹿を殺した」

(12) *pataz-un* *dau[=s* *'isbabanal]* *[a* *maaz=a* *'ivut]*.
kill-PF HS=OBL2 Isbananal NOM NOM snake
「イシババナル（姓の人）がその蛇を殺したそうだ」

3 先行研究

3.1 空間的接頭辞に関する先行研究

本節では、本論文で「空間的接頭辞」と呼ぶものが先行研究でどのように扱われてきたかを概観する。

何その他(1986:103-106)は、例文(1)から(4)に含まれる *'i-* （およびそれと同類の要素、つまり、下の(13)で挙げる一群の接頭辞）を「介詞」[8]と呼び、「名詞、代名詞、名詞性の句の前に付加される虚詞」と説明している（虚詞とは機能語という意味である）[9]。

また、Jeng(1977)は例文(1)-(4)に含まれる *'i-* と同類の要素のいくつかを「動詞」に分類している(Jeng 1977:247)。

しかし、ここでは *'i-* を接頭辞と考え、これを**空間的接頭辞**(spational prefix、 SP)と呼ぶことにする。前置詞ではなく、接頭辞と考える根拠は次の二つ：
（あ）空間的接頭辞とそれに続く語基の間に入りうる語がないこと。
（い）空間的接頭辞のさらに前に使役接頭辞が付きうること。

空間的接頭辞は、位置や方向、起点、抽象的な関係など、英語の前置詞で表されるような種々の空間的概念を表す。主な空間的接頭辞には、次の(13)に挙げたものがある：

(13) 空間的接頭辞

'i- 居所（～にいる）	*'u-* 居所（～にいる）
kau-/ku- 方向（～へ）	*un-* 方向・非過去（～へ）
sai- 方向・過去（～へ行った・来た）	*sau-* 方向（～へ）
tauna- 到着（～に着く）	*maisi-* 出所（～から）
maka- 経由点（～を通って）	*taki-* 居住・出身地
kat- 一時的居住	*'ingka-* 開始点（～から）
kana- 依存関係（～に頼って）	*sana-* 目標（～を目指して）

3.2 前置詞句および空間動詞に関する先行研究

何その他(1986:101ff)は、本稿で前置詞 B 句, 前置詞 C 句、空間動詞と呼ぶものを比較し、それぞれ「“特指的地点”(specific place)」、「“確指的地点”(definite place)」、「“泛指

---

[8] 介詞(coverb)とは、伝統的な中国語学で用いられる用語で、動詞に起源を持つ前置詞のことを指す。

[9] 中部方言を格文法などの理論を用いて分析した Jeng(1977)は、本論文で空間的接頭辞と呼んでいるものをあるものは verb として分類し、あるものは case-marking particle と呼んでおり、やはり語の一種と考えたようである(Jeng 1977:65, 246-247).

的地点”(general place)」を表すと説明している。しかし、以下に示すデータからもわかる通り、そのような意味論的な説明では明らかにできない違いが三つの間にはある。

Lin(1996:50-51)は南投縣信義鄉東埔村で話されている南部方言を分析し、前置詞 C（例：*ku-sia-n*）の末尾の *n* を「頭子音が空であるのを埋めるために挿入された音」と述べている。

ku-sia=in [ku.sia.nin] "to have gone to some place"

この分析がすべてを網羅的に説明できるものではないことは、例文(3)から明らかである。例文(3)では、前置詞 C *'i-sia-n* が単独で現れており、この語尾の *n* は「頭子音が空であるのを埋めるために挿入された」とは考えられないからである。本論文では、上の *kusia* と *kusian* をどちらも前置詞の一種とみなし、「*n* の挿入」というような音韻規則は認めない。

4 三種類の「前置詞」

本論文では、この三つの場所表現の間にある形態法および統語機能の違いにむしろ注目し、検討していく。

4.1 前置詞 A

4.1.1 統語法

前置詞 A は場所格標識 *sia* のことである。つまり、三項対立である、前置詞的格標識の体系の中のひとつである。従属部として、名詞句を義務的にとる。「前置詞 A を頭部とする句」（前置詞 A 句）は必ず本動詞の後ろに付随的に現れて、その付加語（adjunct）として機能する。単独で使用することはできない（例えば「彼はどこで休んだのか?」という問いに対して「ヒノキの根元で」と答えるときには前置詞 A 句ではなく前置詞 B 句（後述）で答えるのが一般的である）。また、英語や中国語の前置詞句とは異なり、名詞を修飾する機能はない。

前置詞 A 句は、行為がおこなわれる場所や、移動の着点などを表す.

(14) *'is-lunghu* *saia* **sia** **taklis** **tu** **banil=tia**.
AF.INTR-rest NOM.3SG LOC root LK cypress=OBL1.that
「彼は檜の根元で休んだ。」

(15) *ka-vavaa=in* *saia* *mal'anuhu* **sia** **nusung**.
LP(do)-hastily=already NOM.3SG AF.sit.down LOC mortar
「彼は急いで臼に座った。」

(16) *m.ati-stub* *mas* *'asik* *at*、 *'is-linsup* **sia** **tuhu**.
AF.LP(cut)-cut OBL2 broom and RF-insert LOC buttocks
「（その子は）帚を切って、尻に挿した」

(17) *'is-linsup* *dau* *a* *lukis* *a* *b<in>uhas=a* **sia** **tuhu**.
RF-insert HS NOM tree LK break<PAST.PF>=NOM.DIST LOC buttocks
「（その子はお母さんの）尻に折った木を挿したそうだ。」

4.1.2 形態法

前置詞 A は、不変化詞である。形態法に関しては、動詞的特徴をまったく持たない。すなわち：(a) 命令形がない。(b) 過去形がない。(c) 反復形（重複形）がない。

4.2 前置詞 C

次に前置詞 C を見る。前置詞 B の特徴を理解するためには、まず先に前置詞 C を見ておいた方がよいからである。

4.2.1 導入

本論文で前置詞 C と呼ぶものは、*-sian*（または *-sain*）を語基とし、それに空間的接頭辞（または語彙的接頭辞）が付いて造られる動詞である。前置詞 C は語根が特殊（'empty morph'）なだけで、形態的には空間動詞の一種だといえる（空間動詞と同じく、対応する命令形や過去形があるし、反復相を表すための重複も可能である）。しかし、「場所を指定する表現」（前置詞 A 句あるいは後倚辞指示詞で示される）を義務的に要求する、という統語上の特徴によって「前置詞的」であり、空間動詞および一般の動詞からは区別される。前置詞 C の例：

(18) a. *'i-sia-n* *sia* *luluman*
SP(at)-LOC-N LOC pigsty
「豚小屋にいる」

b. *kau-sia-n* *sia* *'ihaipu-an=tia*
SP(to) -LOC-N LOC watch.millet-LF=OBL.that
「鳥追いをする場所に行く」

c. *tauna-sia-n* *sia* *huma*
SP(arrive)-LOC-N LOC field
「畑に着く」[10]

d. *p-i-sai-n-un*[10] *sia* *haili* *tu* *zuszus*
CAUS-SP(at)-LOC-N-PF LOC sword LK tip
「刀の先に（それを）置く」

4.2.2 統語機能

すでに述べたように、前置詞 C は、後ろに前置詞 A 句または後倚辞指示詞を義務的にとる。前置詞 C は、この点において「前置詞的」である以外は、一般の動詞と同じ統語的機能を持つ。

A. 主語項を含む節の中で頭部（述語）として

(19) *kau-sai-n* *a* *takbanuaz* *sia* *nas-tulkit-daingaz*
SP(to)-LOC-N NOM Takbanuaz LOC the.late-Tulkit-mature
「タクバヌアズ（姓の人々）は老トゥルキット（故人）のところへ行った」

(20) *na* *kau-sia-n=ta* *sia* *'uvaaz.*
IRR SP(to)-LOC-N=NOM.1PLINC LOC child
「私たちはいっしょに子供のところへ行きましょう。」

(21) *maisi-sai-n=im* *sia* *bulbul=tia* *ma-na-nakis*
SP(from)-LOC-N=NOM.1PLEXC LOC Bulbul=that AF-RDP-climb

---

10 「～に置く」という意味の *pisainun* では語基が *sain* であって *sian* ではない（**pisianun* は許容されない）。ブヌン語には、共時的形態音韻規則としての音位転換(metathesis)があり、-CiaC は（C は任意の子音を表す）すぐ後ろに接尾辞 *-a, -an, -az, -un* のいずれかが後続すると、-CaiC に交替する。*pi-* + *sian* + *-un* > *pisainun* と二つの母音がその位置が交換するのも、この音位転換の規則によるものと推測される。

pang-na-sia *ning'av* *at,*
LP(stop)-NA-SIA pond and
「私どもはブルブル（地名）から（山を）登っていって、池のところで止まって、」

B. 小詞 =*in*、 *dau* を含む節の述語として

(22) *kau-sia-n***=in** *sia* *'inaak* *tu* *nas-tama-hudas,*
SP(to)-LOC-N=already LOC POSS.1SG LK the.late-father-grandparent

tahu *dau* *tu,*
AF.tell HS COMP
「（彼は）私のおじいさん（故人）のところへ行って、告げたそうだ」

(23) *maka-sain***=in**=*tia* *saia* *kau-nastu.*
SP(through)-LOC-N=already=OBL1.DIST NOM.3SG SP(to)-downward
「彼はそこを通って降りた」

(24) *kin-kinuz* *dau* *saia,* *tauna-sia-n***=in** **dau** *sia* *huma,*
LP(follow)-follow HS NOM.3SG SP(arrive)-LOC-N=already HS LOC field
hai, *kau-sia-n***=in** **dau** *sia* *dangian* *m-ihaipu=tia*
CONJ SP(to)-LOC-N=already HS LOC place AF-watch.millet=OBL.that
「彼は（妻の）後をつけていって畑に到着し、鳥追いをする場所へ行ったそうだ」

4.2.3 形態法

すでに述べたことだが、前置詞 C は、形態法に関して、一般の動詞とまったく同じ特徴を持つ。すなわち：(a) 命令形がある。(b) 過去形がある。(c) 反復形（重複形）がある。

4.3 前置詞 B

4.3.1 導入

前置詞 B は語基 *-sia* に、空間的接頭辞（または語彙的接頭辞）が付いて造られる。造りは前置詞 C とよく似ているけれども、統語機能は大きく異なる[11]。

4.3.2 統語機能

空間動詞や前置詞 C の取る補足成分が前置詞 A 句だったのに対し、前置詞 B が取る補足成分は「"裸"の名詞句」(bare NP)である．この点では、前置詞 B 句は前置詞 A 句と並行的なわけである。

「前置詞とその補足成分との間にはいかなる要素も割り込めない」という点でも、前置詞 B 句は前置詞 A 句と並行的である．この点は、前置詞 C とその補足成分の間に主語項や =*in, dau* などの小詞が割り込めたのと対照的である。次の例文を見てみよう．

(25) **kau-sai-n** *a* *takbanuaz* *sia* *nas-tulkit-daingaz*
SP(to)-LOC-N NOM Takbanuaz LOC the.late-Tulkit-mature
「タクバヌアズ（姓の人々）は老トゥルキット（故人）のところへ行った」

---

[11] 前置詞と前置詞的動詞の区別は、南部方言に特有の現象であると思われる。同じブヌン語でも、北部方言や中部方言では、前置詞と前置詞的動詞の対立がない。場所格標識 *ca'an*（北部方言）、*haan* ~ *ha'an*（中部方言）に空間的接頭辞などがついたものがあるにすぎない。

(26) *ngaus* *saia* **kau-sia** *taluhan=tia*
first NOM.3SG SP(to)-LOC hut=OBL1.DIST
「彼はまずその小屋へ行った」

例文(25)では前置詞 C *kausain* が述語として用いられ、補足成分 *sia nas-tulkit-daingaz* との間に主語項 *a takbanuaz* が現れている. それに対し、例文(26)では、述語は動詞 *ngaus* 「まず先に」であり、前置詞 B 句 *kau-sia taluhan=tia* は後ろに現れている。

前置詞 B 句は、前置詞 A 句とは異なり、節の先頭に現れることができる（ただし、同じ節には主語や *=in*、 *dau* などの小詞は共起しえない）.

(27) **kau-sia** **wanaul-an** *hai,* *padagi-an=saitia* *danum* *a* *haugu*
SP(to)-LOC fetch.water-LF CONJ put-LF=NEU.3sg water NOM container
「（その女は）水汲み場へ行って、水容れに水を入れた」

(28) *'istanda=an* *hai,* **maka-sia** **huma** **tu** **'itu-takistaulaan**
Istanda=NOM.PROX2 TM AF.SP(through)-LOC field LK POSS-Takistaulaan
「イシタンダはタキシタオランの畑を通って行った」

(29) *mais* *m-insuma* *kata* *kau-dii* *na* *m-aun* *hai,*
if AF-appear NOM.1PLINC SP(to)-there IRR AF-eat CONJ
kau-sia **nusung** *m-al'anuhu.*
SP(to)-LOC mortar AF-sit.down
「私たちがそこへ食事をしに行くと、（彼らは）臼のところへ行って座る」

さらに、前置詞句は名詞句の中で、連結辞を介して、頭部名詞を修飾する（それに対し、前置詞的動詞句が名詞修飾成分として用いられている例は今のところ採取していない）。

(30) **'i-sia** **dalah=tin** *tu* *bunun*
SP(at)-LOC earth=OBL.PROX1 LK people
「この土地にいる人々」

(31) *si-daukdauk* *saia* *tu'ulan* **'i-sia** **'<in>ama** **saitia**
SP(get)-slowly NOM.3sg axe SP(at)-LOC PAST.PF-carry NEU.3SG
tu **davaz=tia**.
LK net.bag=OBL.DIST
「彼は、彼（=自分）が背負っていた網袋にある斧をそうっと手に取って」

4.3.3 形態法

前置詞 B は、形態法に関しては、動詞的特徴を一部だけ持つ。すなわち：(a) 命令形がない。(b) 過去形はある。(c) 反復形（重複形）は一部の前置詞にのみある。

4.3.4 意味

すでに見たように、前置詞 A 句は漠然と「場所」を表し、その解釈は本動詞の意味に依存している。それに対し、前置詞 B 句の場合は、前置詞 B に空間的接頭辞かまたは語彙的接頭辞のいずれかが含まれているため、その意味は前置詞 A 句に比べより具体的である。たとえば、同じ「方向」でも、行為者が移動する場所（着点）と、行為の結果として対象物が移動する場所（着点）とは違う前置詞で示される.

(32) *m-insuma* *tumaz=a* **kau-sia** **bunun=tia**.
AF-appear bear=NOM.DIST SP(to)-LOC human=OBL.DIST
「その熊がやってきて、その人の所へ行った」

(33) *kilim* *'ismuut,* *'an-sapah-un* **pun-sia** **sasbinaz=tia**.
AF.search grass LP(carry)-in.mouth-PF CAUS.SP(to)-LOC chief=OBL.DIST
「（その犬は）草を探し（それを）口に咥えて、その王様のところへ持っていった。」

次の(34)、(35)では、前置詞に *kalin-*「追いかける」、 *kau-*「捨てる」という語彙的接頭辞がそれぞれ含まれている。それにより前置詞句が表す「方向」がどのようなタイプの動作に関る「方向」なのかが具体的にわかるようになっている.

(34) *kalin-sasu-un=s* *pais* *ma-sinap,* **kalin-na-sia** **litu=tia**.
LP(chase)-soon-PF=OBL2 enemy AF-chase LP(chase)-NA-LOC Litu=OBL1.DIST
「すぐに敵が追いかけてきて、リト（地名）まで追いかけてきた．」

(35) *na* *'is-takunav=ta* *sain* **ma-kau-na-sia** **taklis** **tu** **'asik**.
IRR RF-throw=OBL.1PLINC NOM.PROX AF-LP(throw)-NA-LOC root LK hemp.palm
「私たちは、これをシュロの根元に捨てましょう」

以上見てきたことから、前置詞 B について次のことがわかった.

一. 前置詞 B は前置詞 A と共通する構造上の性質を持ちながら、統語的にも意味的にもそれよりずっと動詞に近い性質を持つ。

二. 前置詞 B と前置詞 C はほぼ同じ意味を表しながら、その二つの形式はそれぞれ異なる統語環境に現れる[12]。また、形態法上も、若干の違いがある。

5 方言間の比較

三つの方言における「前置詞」を比較すると、前置詞 B と前置詞 C の間に形式上の区別があるのは、南部方言のみであって、北部方言および中部方言では両者に形式上の区別がないことがわかる。

	前置詞 A	前置詞 B	前置詞 C	空間動詞
北部方言	*ha'an dalaq*「地面に」	*'i-ha'an dalaq*「地面に」		*'i-lumaq*「家にいる」
中部方言	*ha'an dalaq*「地面に」	*'i-ha'an dalaq*「地面に」		*'i-lumaq*「家にいる」
南部方言	*sia dalah*「地面に」	*'i-sia dalah*「地面に」	*'i-sia-n sia luluman*「豚小屋に」	*'i-lumah*「家にいる」

また、北部方言および中部方言の前置詞 A（*ha'an*）は（接辞なしで）述語として機能しうる。それに対して、南部方言の前置詞 A（*sia*）には述語としての機能はない。

---

[12] 何その他(1986)は前置詞 C の語基を *sia* + *-an* と分析している（接尾辞 *-an* は場所名詞をつくるのに使われる接尾辞である）。しかし，そうした分析を支持する事実は今のところ見つかっていない。そのため，本論文では前置詞の語根 *-sia* と関連づけながらも、語尾は *-n* とするにとどめた。いずれにせよ、同じ接頭辞を共有する前置詞 B と前置詞 C（e.g. *kau-sia* vs. *kau-sia-n*）はまず第一に形が似ているし、また表す意味も基本的に同じであり、さらに両者の間の選択が主に統語的な条件によってなされているのだとすれば、この二つの形式は一つの語彙素（lexeme）の屈折によるものだと考えることもできるわけである（前置詞 C の語尾 *-n* を屈折接辞と考えることになる）。そのような分析は、例えば英語の形容詞 sharp と副詞 sharp-ly の間に屈折の関係を認めるのと似ている。また、同じ接頭辞を共有する前置詞 B と前置詞 C がほんとうに同じ意味を表すのか、今後の詳しい調査が必要である。

(36a) *('i-)ha'an=cia* *quma.* (Northern)
at-LOC=NOM.3SG field
「彼（彼女）は畑にいる。」

(36b) *('i-)ha'an=aipa* *quma.* (Central)
LOC=NOM.3SG field
「彼（彼女）は畑にいる。」

(36c) *'i-sia-n* *saia* *sia* *huma.* (Southern)
at-LOC-N NOM.3SG LOC field
「彼（彼女）は畑にいる。」

北部方言および中部方言の前置詞 A および前置詞 B に命令形を作る接尾辞がつく。それに対し、南部方言では、前置詞 A, B には命令接尾辞をつけることができない。命令接尾辞は前置詞 C につけなければならない。

(37a) *'i-ha'an-a nata'=ta* *munungqu.* (Northern)
LOC-IMP outside=OBL1 AF.sit.down
「家の外で座りなさい。」

(37b) *('i-)ha'an-a nata'=ta* *ma-lungqu.* (Central)
LOC-IMP outside=OBL1 AF-sit.down
「家の外で座りなさい。」

(37c) *'i-sain-a* *sia* *nata=tia* *m-al'anuhu.* (Southern)
at-SIAN-IMP LOC outside=OBL1 AF-sit.down
「家の外で座りなさい。」

(38a) *p-i-ha'an-i* *nata'=ta* *ma-daimpuc.* (Northern)
CAUS-at-LOC-IMP outside=OBL1 AF-put.away
「家の外に（それを）しまいなさい。」

(38b) *(p-i-)ha'an-i* *nata'=ta* *ma-sangkun.* (Central)
CAUS-at-LOC-IMP outside=OBL1 AF-put.away
「家の外に（それを）しまいなさい。」

(38c) *p-i-sain-av* *sia* *nata=tia* *ma-sangkun.* (Southern)
CAUS-at-SIAN-IMP LOC outside=OBL1 AF-put.away
「家の外に（それを）しまいなさい。」

6 結論

以上、本論文では、ブヌン語（南部方言）の三種類の「前置詞」を、その形態法と統語機能に焦点をあてて、考察した。その三つは一つの連続体に沿って存在するものと位置づけることができる。すなわち、名詞的な表現（前置詞 A 句）と動詞的な表現（前置詞 C 句）が両極にあり、その間に中間的な表現（前置詞 B 句）があると考えられる。そのうち、前置詞 B 句と前置詞 C 句は、基本的には同じ意味を表しながら、それぞれ異なる統語環境に現れ、また形態法にも若干の違いがある。

本論文では次の点を述べた：

[A] 前置詞ＢおよびＣは接頭辞と語根からなる。例に挙げた *'i-sia*, *'i-sian* の *'i-* を本発表では空間的接頭辞とし、これを介詞（語）とみなすのは妥当ではないとした。

[B] 前置詞Ａ、Ｂ、Ｃの三つは、述語的/動詞的という極から付加詞的/副詞的という極にいたる連続体の中に位置づけられる。最も述語に近い性質を持つのが前置詞Ｃであり、より付加詞的なのが前置詞Ａである。前置詞Ｂはその中間にある。

[C] 前置詞Ｂと前置詞Ｃは、純粋に形態統語的な理由で使い分けられる。統語的には、後者は主語項や *dau*（…だそうだ）といった証拠性に関わる小詞を含みうるのに対し、前者は含み得ない。また形態的には、後者からは命令形が派生されるのに対し、前者からは派生されない。

表：

	形態			統語					
	過去	重複	命令	単独使用[13]	節頭[14]	主語項	=*in*	*dau*	従属部
前置詞Ａ	－	－	－	－(??)	－	－	－	－	裸の名詞句
前置詞Ｂ	＋	(＋)	－	＋	＋	－	－	－	裸の名詞句
前置詞Ｃ	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	前置詞Ａ句

さらに、以上の南部方言に対応する北部方言と中部方言の表現を考察し、その異同について考察した。特に、南部方言で区別されている前置詞ＢとＣが、北部方言と中部方言では形式上の区別がないことに注目した。

参考文献

何汝芬・曽思奇・李文甦・林青春. 1986. 『高山族語言簡志（布嫩語）』（中国少数民族語言簡志叢書）. 北京: 民族出版社.

Jeng, Heng-hsiung. 1969. A Preliminary Report on a Bunun Dialect as spoken in Hsinyi. （台湾省南投縣信義鄉 布農話初歩調査報告）. Nantou, Taiwan.

Jeng, Heng-hsiung. 1977. *Topic and Focus in Bunun*. Special Publication of the Institute of History and Philology. No.72. Taipei: Academia Sinica

齊莉莎（Elizabeth Zeitoun）. 2001. 『布農語参考語法』台北：遠流出版

Li, Paul Jen-kuei. 1988. "A Comparative Study of Bunun Dialects." *Bulletin of the Institute of History and Philology* 59.2: 479-508. Taipei: Academia Sinica

Li, Paul Jen-kuei. 1994. "A Syntactic Typology of Formosan Languages — Case Markers on Nouns and Pronouns." In Dah-an Ho and Chiu-yu Tseng (eds.). *Proceedings of the Fourth International Symposium on Chinese Languages and Linguistics* (July 18-20, 1994). pp.270-89.

Lin, Hsiu-hsu（林修旭）1996. *Isbukun Phonology: A Study of Its Segments, Syllable Structure and Phonological Processes*. 《布農語東埔方言音韻研究》 Hsinchu: Tsing Hua University MA thesis.

Starosta, Stanley. 1988. "A Grammatical Typology of Formosan Languages." *Bulletin of the Institute of History and Philology* 59.2: 541-576. Taipei: Academia Sinica

13 「単独使用」とは、「名詞句とあわさり文になりうるかどうか」を意味する。

14 「節頭」とは、「前置詞句を節の先頭（本動詞の前）に置くことができるかどうか」を意味する。